

氏名	具 賢 淑
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	学 術
学位授与番号	博甲第1591号
学位授与の日付	平成9年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	夏目漱石の辿った人間性の探求
論文審査委員	教授 工藤 進思郎 教授 稲村 秀一 教授 渡邊 護 教授 下河部 行輝 山陽学園大学教授 吉田俊彦

学位論文内容の要旨

本論文は、作家としての夏目漱石の出世作『我輩は猫である』から最晩年の『明暗』に至る主要作品を取り上げ、漱石における人間性の探求が、どのように展開・深化していったか、その様相を全6章にわたって考察したものである。

第1章「漱石の人間観」では、主に『我輩は猫である』『坊っちゃん』『硝子戸の中』など初期の作品を取り上げ、そこに描かれている人間の優しさや思いやり、正直・正義の世界について論じた。漱石はその主要作品を通して、人間として最も基本的に備えなければならぬ「人情」の世界を描いた。それは人間の優しさや思いやり、正直・正義の世界である。漱石はそのような「人情」的な生き方を重んじて、生涯にわたってこれを追求し続けた作家であった。「人情」とは、一般的には単に善良な心、人間の親切で温かい心と思われがちであるが、漱石が重んじたのは人間本来の姿を失わず、素直に生きる「人情」的な生き方であった。それは「天」ないし「自然」の成り行きに従うのをよしとする生き方で、そこに漱石の基本的な人間観をうかがうことができる。

第2章「『人情』の世界に対立する『不人情』の世界」では、『我輩は猫である』『坊っちゃん』『門』『明暗』などの諸作に描かれている「不人情」の世界について論じた。前章で考察した「人情」の世界に対立する「不人情」の世界として、漱石は薄情で冷たい態度や他人に対する無関心、生命の尊厳性に欠けている世界、権力や金力を振り回す世界などを取り上げて描き、これらを辛辣な調子で批判することによって、「人情」の本質に鋭く迫っている。

第3章「『非人情』の世界」では、『文学論』や『草枕』に見られる「非人情」について考察するとともに、漱石以後の人々の作品に現われた「非人情」についても取り上げて論じた。漱石は「非人情」の世界を描いた作家として知られているが、その「非人情」とは、『文学論』第2編第3章の「fに伴なふ幻惑」に述べられているように、「従来の人情や不人情を超越した理想的な自由の境地」であり、従来 of 因習や人情に捕われることなく、「道徳抜き」で対象そのものを「ありのまま」に素直に鑑賞することである。このような「非人情」の世界が最もよく現われている作品は『草枕』であるが、長与善郎の『竹沢先生と云ふ人』『夕子の旅行記』や、梶井基次郎の『城のある町にて』などにも、同様な「非人情」の世界をうかがうことができる。一方、同じく漱石の影響を受けた人の中にも、三木露風のように「崇高な人情」ないし「理性的な人情」の意味で「非人情」という語を用いたり、内田百閒のようにこれを「不人情」と同義に使っている例も見受けられる。

第4章「『ありのまま』の表現」では、正岡子規から漱石に至る写生文ないし写生論について論じるとともに、自然主義作家の見解についても考察を加え、漱石における「ありのまま」の表現の特徴と独自性を探った。主観や先入観も入れず対象を「ありのまま」に

客観的に表現するという文学の方法は、正岡子規の「写生文」をはじめ、自然主義作家としてゾライズムを唱えた小杉天外や、「平面描写」を説いた田山花袋らにおいても見出すことができる。しかし、余裕を持ったattractiveな「写生文」、ただ「真」のみを描くのではなく「美・善・荘厳」をも含む倫理的な芸術の創造を目指したところに、漱石文学における表現上の特質と独自性が認められ、それは「非人情」の態度に通じるとともに、漱石の抱く「自然観」ともまた密接に関わっていることに注意しなければならない。

第5章「夏目漱石の『自然観』」では、『それから』『門』『心』の3作品を中心に、漱石の「自然観」について詳細に論述した。漱石は初期の作品から晩年の作品に至るまで「自然」という言葉をよく使っている。それは「自然」あるいは「天」の成り行きに従うことを何よりも重んじた漱石の生き方の反映と見ることができる。そのような漱石の「自然観」には、幼い頃から親しんできた漢文学や東洋哲学の思想、特に『老子』や『荘子』から受けた影響とともに、「禅」の影響を見逃してはならない。漱石はすでに大学生の頃から「禅」の世界に対して興味を持ち始め、明治27年から翌年にわたって参禅したことがあるが、この時の体験から得た考え方は、『それから』を経て『門』のモチーフになっていると考えられる。「父母未生以前本来とは何か」を問う禅の世界に深く感銘し、その自己を忘れた絶対の境地を、己れの「自然観」として受け入れようとしたのである。

第6章「漱石の『則天去私』の世界」では、関連資料を中心に「則天去私」の意味を探り、次いで『明暗』における「則天去私」の世界について論じるとともに、そのような人間観が初期の作品にも現われている事実を指摘した。「天に則り私を去る」という漱石のいわゆる「則天去私」は、一般には晩年に至って新しく悟った思想と言われているが、実はそうではなく、漱石が生涯にわたって追求してきた「人情」の世界に対する考え方や「自然観」が、晩年になって纏められ体系化されたものと考えべきである。そのことは漱石の日記や書簡からもうかがうことが出来るのみならず、初期の作品『我輩は猫である』に描かれている「馬鹿竹」の逸話に早くも示されており、そして言われるように最晩年の『明暗』における清子の「大きな自然」に従って行こうとする姿は、お延の「技巧」に飾られた「我」の世界と対比されて、「則天去私」の生き方を示すものにほかならない。「則天去私」とは、禅でいう「父母未生以前本来」の世界であり、「洒落超脱ノ趣」や「笑而不答心自閑ト云フ趣」のある「大きな自然」としての生き方である。漱石は生涯にわたって、このような「則天去私」の世界を探求し、その中で「積極的な意志」を持って「自己本位」に生きようとしたのである。

結語

漱石の追求してきた「人間性」は、結局のところ「大きな自然」に従って生きることによって実現する。それは「世間の掟」に左右されることでもなく、「自己の心を捕へんと欲する」のでもなく、「自然」に生かされて生きる生き方であり、それこそが真に「自己本位」に生きることだったのである。

論文審査結果の要旨

本論文の筆者は、修士論文「夏目漱石における『則天去私』の世界」のほか、『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』に発表した「夏目漱石の非人情の世界」（創刊号・1995年5月）、「正岡子規・夏目漱石および自然主義作家における『ありのまま』の表現をめぐって」（第2号、1996年3月）、及び「夏目漱石の自然観—『門』における「禅」の世界を中心に—」（第3号、1997年3月）の3論文や、平成8年8月22・23両日、宮城県仙台市で開催された第28回解釈学会全国大会における研究発表「夏目漱石の『それから』論—『自然の昔に帰る』代助の生き方を中心に—」等の諸業績を精力的に積み上げてきた。

本学位論文は、これらの研究を踏まえつつ、さらに論の展開と深化を図って新たに書き下ろされたもので、作家漱石の出世作『我輩は猫である』から最晩年の『明暗』に至る主要作品を取り上げ、テーマを漱石における「人間性」の探求という問題に絞って、その変遷と展開・深化の様相を、人情・不人情・非人情、「ありのまま」の表現、自然観及び「則天去私」の思想など、多方面からの丹念かつ精緻な考察を通して跡づけている。漱石の人間観、ひいては日本近代文学の抱える重要な問題の在処にも鋭く迫った力作であり、400字詰原稿用紙に換算して約570余枚に達する意欲的な論文として評価できる。最新版の『漱石

全集』をテキストとして用いて、小説作品はもとより評論・随筆・断片・日記・書簡等も綿密に読み込み、さらに先行の研究文献にも広く目を通すとともに、多くの資料を駆使してその要所を確実に押さえつつ論を組み立てている。

特に第5章「夏目漱石の自然観」は、代表作とされる『それから』『門』『心』の3作品を中心に、老荘および禅の思想との関連性や、倫理的側面からの考察をも加え、漱石の自然観の形成・深化の様相を丹念に跡づけつつ、「他人本位」から「自己本位」の生き方へ、そしてついに『明暗』における「則天去私」の思想へと繋がっていく筋道を、独自の視点から明らかにしたユニークな論になっており、筆者の力量と独創性をうかがわせるにたる傑出した章と言ってよい。また全体的に外国人離れした日本語の正確さは、用意周到な目次の立て方とともに、側面から本論文を引立てている。これらの点から見て、今後自立した研究者としての出発は十分に保証できるとの評価を得て、博士の学位論文に値するものと認定された。

もっとも一方では、漱石以後の作家の「非人情」を取り上げた第3章の第3・4節のように、指摘自体は当たっているにしても、何のために指摘したのか、論としての意図が曖昧になった部分もあり、また漱石文学と東洋思想との関係は詳細かつ具体的に論じられているが、西洋における自然観や愛の思想との関係についてはほとんど論究されていない。さらに言えば、絶筆となった最後の作品『明暗』に関する考察も、やや簡単な論述に終わっているのも惜しまれる。解釈学会の機関誌『解釈』には近く論文の掲載が予定されているが、さらに今後は日・韓両国の学会誌等への論文発表に向け、なお一層の研鑽を期待する次第である。